

創刊40周年+ing 地域活性化ジャーナル  
モビリティとその世界

SINCE  
1984

# Carpia

カーピアセロム  
CELHOME

連載! 続 北のクルマ物語

## 五番館の歴史~その6~

北海道の自動車販売の人財を輩出した五番館

2026  
2+3  
新春号

作画:石川寿彦



「飲酒運転をしない、させない、  
許さない、そして見逃さない!」  
(北海道環境生活部くらし安全局  
地域安全課ホームページ)



## ジャパンモビリティショー札幌2026

移動や輸送・配送、さらにその技術のすべてを知る北海道最大のイベント  
「Japan Mobility Show Sapporo」がさらなる進化を遂げて開催!!

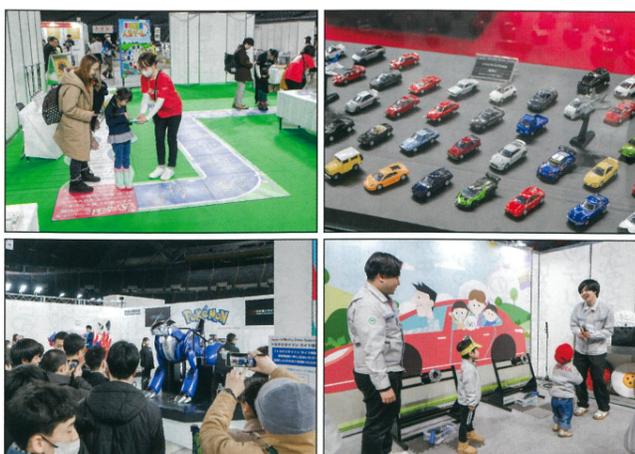
## 移動や輸送・配送、さらにその技術の すべてを知る北海道最大のイベント



### 「Japan Mobility Show Sapporo」が さらなる進化を遂げて開催!!

2026年1月23~25日  
会場/大和ハウスプレミストドーム  
主催/ジャパンモビリティショー札幌2026実行委員会

2012年に「札幌モーターショー」としてスタートした北海道最大の自動車イベント、前回から東京での元となるイベントが「モビリティショー」とタイトル変更したことに合わせ札幌開催も「Japan Mobility Show Sapporo」となった。イベント内容も単なる自動車ショーではなく、実際に乗車体験や、新車の契約も出来る他、スイーツのコーナーやグッズ販売ブースも充実、これまでとは違った趣向も盛り込まれ、多くの観客を楽しませるイベントとして開催されたのである。



### 自動車産業 アピールの場とって!!

日本国内で本格的な乗用車生産が開始されたのは昭和30年代に入ってからのこと。太平洋戦争の敗戦からアメリカを中心とした占領軍の統治下におかれた日本は乗用車の生産を禁止されたためである。その占領軍GHQが乗用車生産を許可したのは昭和22年6月だったのだが、その許された生産規模は業界全体でわずか3000台。これでは自動車産業復興の一助にはなるはずもなかった。

とはいえ戦前の日本自動車業界は軍用車やトラックなどの貨物車生産が主体であり、国内の一般乗用車は輸入車を中心としたわけ、乗用車生産が許可されたとはいえ、国内メーカーはその製造ノウハウを持ち合わせていなかったのも事実。そのため、独自開発を進めると決めたトヨタ以外の国内メーカーの多くが欧米車のノックダウン生産の道を選んだのである。

そのように決して恵まれた環境にはなかった日本の自動車業界だったが、なんとか体裁も整い、業界一団となって自動車関連の展示イベントを開催したのは、終戦から9年後の昭和29年のこと。東京の中心である日比谷公園を会場に「全日本自動車ショー」が開催されたのである。とはいえ、トータル267台といわれた展示車両のほとんどがオート3輪やトラックなど貨物車であり、乗用車はわずか17台でしかなかった。それでも観客動員は57万人と大盛況であり、戦後の復興に沸く日本国内において一般消費者の目を自動車に向けさせる大きな役割を担ったのも事実であった。

氷上性能特化型スタッドレス

## WINTER MAXX 03

<ウインターマックス ゼロスリー>



噛み合うように  
氷とタイヤが  
スキマなく密着。  
だから止まる。

【氷上の凸凹と噛み合う】



# 氷上か、雪上か。

シーンで選べるダンロップの  
SUV対応タイヤ



SUV専用スタッドレス

## WINTER MAXX SJ8+

<ウインターマックス エスジェイエイトプラス>



SUVの走りに対応。  
タフなウインター性能で  
安定した走りを実現。

【掻き出す溝】

あなたのタイヤに  
履きかえよう。



DUNLOP



車両が減少してしまったのは残念なところ。さらに、純粋なプロトタイプカーやコンセプトカー、将来を見通せるカスタムメイドカーなどの希少車はより減少。その場で購入契約ができる市販車の展示が多く、ショーとしての性格が変わってきたのかもしれない。

ただ少数ではあったが、思わず目を奪われるほどの異彩を放つコンセプトカーや将来を見据えたプロトタイプを展示してくれたメーカーがあったのも事実。そんな魅力的なクルマをメーカー別に数台、紹介してみよう。

今回最も広い展示スペースを確保しているのがトヨタである。そこには市販車中心の他メーカーとは違い、完全なコンセプトカーを主力に置いた展示方針がとられていた。なかでも圧倒的な存在感を發揮していたのが「センチュリー」だろう。トヨタがレクサスを超える独立した超高級ブランドとした「センチュリー」、これまでの皇室御用達のようなVIP専用セタンというイメージからはかけ離れた巨大なSUVタイプが展示されていたのである。内装は派手なオレンジ色で、シートは独立性を確保するため4人乗りとされ、室内の余裕は充分。市販されればかなりの高価格になるのだろうが、一度はそのステアリングを握ってみたいと思う一台。その存在感はメルセデスやロールスロイスなど寄せ付けない「威風堂々」ぶりであった。

その他にもトヨタには、そのままレーシングカーというほどの超高性能クーペであるGR GRランツリスモアや、「え？これがカローラかよー」と思ってしまったファミリーカーの「主役」というカローラのイメージから大きくかけ離れ、飛びぬけた先進デザインを持つカローラコンセプトなど展示されていたのだが、もっと興味をひかれた展示車両が

その後、この「全日本自動車ショー」は10年後の昭和39年には「東京モーターショー」と名称変更し、パリやデトロイト、フランクフルトなどと並ぶ国際自動車見本市として成長してゆくのだ。そこからの国内自動車メーカーの急成長ぶりは目を見張るほどであり、昭和55年、1980年には自動車生産台数世界一の座につくのである。そこに至る中で、生産技術の確立や一般消費者の購買意欲向上に「東京モーターショー」の果たした役割が大きかったことは言うまでもあるまい。

**あらゆる工業生産の中核として!!**

自動車と言う、製品の製造には、鉄鋼、非鉄金属をはじめ、ゴムやガラス、コンピューター関連のITなど多くの産業界が関係している。その意味では各国の工業生産力を推し量るバロメーターでもある。つまり自動車産業こそ工業製造界の牽引役であるのだ。世界最大の自動車メーカーとなったトヨタが安易に電動車を選ばず、内燃機関の製造を継続し、最高レベルのハイブリッド技術を磨き上げているのは、これまで国内の自動車産業を支えてきた500万人の雇用を守るためであろうし、それがトヨタメーカーたるトヨタの「心意気」でもあるのだろう。

ただし環境問題や温暖化に端を発した世界的な電動化への流れは止められない。それをチャンスと捉えたのが中国であり、高い自動車製造技術を持たなかった彼らは電動車製造へと一直線に向かったのである。電動車の部品点数はガソリン車の半分以上ですみ、充分な蓄電量を持つバッテリーの確保が出来ればよかつたのであるから、日本メーカー

「IMV Origin」という搬送貨物車だった。

なにしろ平板な荷台の先端にドアも屋根もない運転席が設けられているだけのクルマ、つまり普通の常識からいえば未完成車なのである。しかし世界の発展途上国のほとんどはしっかりと自動車技術を持っていない。ならば、誰にでも組み立てられ、誰にでも修理できる超簡単構造のクルマこそ必需品なのである。もし必要なら運転席に屋根やドアをつけたいし、荷台にも枠を加えたい。だからこそ未完成車両でいいわけで、それぞれの国の事情によって変化させてゆく。「未完成の完成形」が、この「IMV Origin」のテーマであり、世界すべての国に自動車利便性を享受してもらおうという、世界最高の自動車メーカーであるトヨタだからこそ「責任を果たそうとする」心意気の現れなのである。

ホンダのブースにも一般市販車とはかけ離れた試作プロトタイプが展示されていた。ホンダの電動車に対するテーマは「EV時代の自由な移動の喜びとは何か？」であり、その回答として用意されたプロトタイプが、メインステージに展示されていた「Honda OSUV」だろう。世界的に自動車人気が中心はSUV系車両であり、ホンダもその流れに沿った試作車を制作。大柄なボディのテールエンドが垂直に切り落とされたデザインであり、リアシートのスペースを余裕を持って確保するにはこのデザインが必要だったのだろうし、スムーズに流れるルーフラインではなく、昔のレースカーに流行したコーダトロンカという後端を切り落としたデザインに似た処理も、空気抵抗を抑える方策を考えたからだろう。

の電動車への対応の遅れが指摘されることもあるが、今回のモビリティショーのブースには電動車も展示されていたことから分かるように、電動化への対応はいつでもできるのだ。ただ、充電施設などのインフラ、充電する電力が環境悪化の元凶である火力発電であったり、危険極まりない原子力発電であったりする状況を考慮するが故だろう。

トヨタ、ホンダを筆頭とする国内自動車メーカーの技術水準は世界最高峰であり、さらに製造業すべてを牽引する役割も担っている。だからこそ2年前から「モーターショー」は「モビリティショー」とタイトルを変更した。そこには「ワーキングシティ」という都市開発チャレンジに着手しているトヨタの豊田章男氏の意向が反映されていたという。コンセプトカーやプロトタイプという将来のクルマ像を見るばかりではなく、移動や輸送などに関わるすべての産業を組み入れようと企画されたのが「モビリティショー」であり、その意図はしっかりと伝わるイベントとなっていた。

**各メーカーの自信作が一堂に!!**

2年前の「札幌モビリティショー」から、「Japan Mobility Show Sapporo」となった今回、日本自動車工業会が主催の「本家本元」と関連を強化したい意向からか、イベントロゴもまったく同じものを採用している。ただし、東京ビッグサイトで開催された「本家」とは規模も内容も比較できないのは当然のこと。また、今回は国内外の17社、2輪4輪合わせて90台を超える展示車両があったのだが、前回と比べて展示

**DJ DRIVE JOY** ~お客様が本当に満足できるものを~

北海道の冬をもっと快適に、もっと安全に

# DJウインターシリコンブレード

※「DJウインターシリコンブレード」は機能付き雪用ワイパーブレードです

## DJウインターシリコンブレード 撥水

ワイパーを動かすだけで、水を弾く!

撥水ガラスコート未施工車に「DJシリコンラバー撥水」を装着しワイパーを動かすと…。



## DJウインターシリコンブレード ガラスコート用

撥水ガラスコートが、長持ち!

こんな症状がありませんか?



せっかくの撥水ガラスコートがこのようになる前に…



「DJシリコンラバーガラスコート用」なら、撥水ガラスコートが長持ち!



★DJウインターシリコンブレードはお近くのトヨタ販売店でお買い求めいただけます。

ご紹介動画をCheck!



**DJ DRIVE JOY** 「ドライブジョイ」はトヨタモビリティパーツ(株)のオリジナルブランドです

**トヨタモビリティパーツ株式会社 北海道統括支社**



そもそもっと気になったホンダ製電動車が「SUPER ONE」という、ホンダの自信作である軽電動車N-ONE e:をレース仕様で改装したクルマだった。ホンダは以前、コンバクトカーのシテイを改装し、オーバードライバーとターボエンジンで武装したクルマを発売したことがある。現在の軽自動車より小さく、車体重量も軽いシテイに110馬力ものエンジンである、じやじゃ馬という言葉では表現しきれない程の強烈なクルマだったのだが、それと同じ手法を軽サイズの電動車N-ONE e:に持ち込んだのである。「軽サイズ電動車でもレースを楽しめるパフォーマンスを確立できた」という開発者のコメントもあつたが、やはりホンダはレースから育ってきたメーカーなんだ…と再認識し、それを喜びたいと思ったのである。

日産で注目すべきは「A-ONE e: EX Honda」という軽電動車サクラのルーフに太陽光発電パネルを装着した車両だろう。この発電パネルは走行時にはルーフ上に収納されているが、停車時には前方に大きく張り出して発電する。これにより充電設備に頼らず電動車として機能するわけで、電動車の普及に尽力する日産らしさが発揮された一台となつた。

その他のメーカーはクルマの将来を見据えた試作プロトタイプの出展は少なく、マツダがエタノール燃料を使うSUVを出展したくらいだったが、メーカー以外には家具や日用品販売のニトリが北海道科学大学と共同でレストアした1900年代初頭のフォードN型や、世界に自動車を普及させる先陣を切ったフォードT型などの展示が目を引いた。これらは自動車の歴史を知るうえで価値あるクルマであり、その作業工程は称賛されるべきだろう。

またレース関係では、スーパー耐久レースシリーズにホンダ・フィットで参戦し、クラスタイトルを争った若見沢の栄建設レーシングチームの活動にも注目すべきだろう。栄建設RTは今シーズンも参戦し、タイトル争いの主役になってくれるはずだ。

**クルマ関連のテーマパークとして!**

イベントオープン日の早朝、気温はマイナス8度以下と相当に冷え込んだのだが、開場の午前10時には観客が次々と来場。さらに最終日の札幌は記録的な大雪に見舞われ、都市機能がマヒする有様だったのだが、トータルの来場者数は7万6000人を超えた。それだけこのモビリティショーがクルマ好きのみならず、多くの市民待望のイベントだった証明なのだろう。

それはこのイベントがクルマの未来を見通す試作プロトタイプカーやコンセプトカーの展示ばかりではなく、有力ディーラーの協賛により市販車の試乗や、購入契約者には豪華なプレゼントが用意されていた。さらにスイーツのコーナーや、子供には人気のポケットモンスターをテーマに、トヨタが制作した「ミライドロン」やホンダが制作した「コライドン」などのミライモビリティに乗れるチャンスもあるなどの工夫があつたせいだろう。

若年層の運転免許取得数は減少傾向にあるとはいえ、自動車は市民生活に欠くべからざる存在であり、移動や配送、経済活動にも大きな役割を果たしている。2回目のモビリティショーとなった今回の成果からも2年後のモビリティショーにも期待したいところで、それを楽しみに待ちたいと思う。